
ESP部のとある現状

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ESP部のとある現状

【Nコード】

N6560C

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

某県立高校ESP部の、その現状の、その一部。

某高校の南校舎の三階。

「相変わらず、ケバケバしい看板だなあ」

そんな事を呟きながら、彼——藤沢亮介——は、『ESP研究会』とケバケバしく書かれた看板を構えたドアをガラガラと開けた。

鞆を肩にかけ、襟まで届く茶髪を風に揺らし、片手をポケットに突っ込んだまま教室を見回すと、窓際の椅子の上に眼鏡の男子生徒を見つけた。

その男子生徒は、藤沢を見つけるや立ち上がり、

「おや？ 藤沢くん。今出て行ったばかりなのにもう戻ってきて、どうしたんだい？ これからデートじゃなかったっけ？」

「え？ ……ふふ。ちよつと、時間を間違えてたんですよ、部長。約束まであと十五分ありました」

「何だ、そうなのか。しかし十五分とは、これまた微妙だな。それまでに人数が集まるかどうか。………まったく、月一の勉強会だというのに、集まりが悪い事甚だしい」

口を尖らせながら、部長はイスにドカツと座る。と、何か思い出したように

「……そうだ。そう言えば、この前君から貰ったアドバイス、『〇×社はそろそろ危ない』というやつ。あれ、当たりだったね。あの大会社がああもあっけなく傾くとは。うちの両親が株主だったもんだから危なかった。危うく大損する所だったよ。直前に売っておいて正解だった。君に感謝する事甚だしいよ」

「無事だったんですか。それは良かった」

藤沢はその端正な顔でもって爽やかに笑う。そして近くの椅子に腰掛けながら、

「まあ、時間までに人が集まれば、最初だけでも参加させてもらいます」

「おお、おお、是非そうしてくれ」

言いながら、部長がまねき猫みたいな笑顔を浮かべていると、
「おっくれましたー！」

と甲高い声。どたどたと駆け込んできたのは、ショートヘアーの
女子生徒、河野五月である。

「あれ？」

藤沢を見て目をぱちくりとしながら、机の上に鞆を降ろした。

「藤沢君、もう来てたんだ。さっき購買部の自販機の前で女の子と
話してなかった？」

「え？ ……いや、知らないな。見間違いだと思うよ」

「ふうん、そっか……」五月はきよろきよろ部室を見渡し、「あと、
来てないのは坂巻君だね」

「ああ、彼もそろそろ来る頃だと思うよ」

藤沢は薄い微笑。

「まったく、坂巻君っていつも来るの遅いよね。何やってるんだか。
今度銃弾してやろうかしら」

「……それを言うなら糾弾だね」

藤沢が含み笑いで呟く。

「ま、どうせ教室で石油売ってるんだろうけど」

「……それは相当危険だね」

藤沢はまたも呟く。しかし五月には藤沢の声は聞こえていないら
しく、藤沢をまじまじと眺めながら、

「……それにしても、藤沢君って、髪きれいだよね。いつもサ
ラサラだし。ねえねえ、一体どんなお手入れ——」

ピーピー、パパピーピー

いきなり、教室に四和音の「魔王」が流れ出した。部長も藤沢も
身に覚えが無いらしく首を捻るだけだったが、五月だけは慌ててブ
レザーのポケットから携帯を取り出すという動作をした。

「はい？ もしもし？」

携帯を耳元に持っていき、話し始める五月。まったく大したセン

スの着メロだ、と部長と藤沢は心の中でハモった。

「誰？ え？ 藤沢君？ な、何言ってるの。藤沢君は今ここに――あ！ さては坂巻君でしょ？ 非通知設定なのを良い事に、いたずらなんかして。そんな事してないで、早く部室に来なさい！ いいわね！」

五月は「まったく！」と頬を膨らませながら、ピツと通話終了ボタンを押した。藤沢はそれを見て肩を竦める。

「んゝ……。そろそろ時間なんで、俺は失礼しますね」

そう言って、藤沢は立ち上がった。

「そうか、惜しいな。まあ、しょうがない。また明日来てくれよ？」
「了解です」

爽やかに笑いながら、藤沢は部室を出て行った。

藤沢が両手をポケットに突っ込み、鞆を肩にかけてすたすた廊下を歩いていると、向こうから凄い形相をした女子生徒が駆けてきた。怒っているのか泣きそうなのか、良く分からない顔だ。その女子は藤沢の前で立ち止まり、一気にまくし立てた。

「ちよっと、ひどいじゃない、藤沢君！ この前見たんだから！ 藤沢君が他の女の子と歩いてる所！ 楽しそうに買い物なんかして！」

「え？ ……………ああ、あれは、その…………違うんだ…………」

困った顔で口籠る藤沢。しかし女子生徒は尚も、

「何が違うって言うのよ！ 私知ってるんだからね！ 藤沢君はすぐ浮気するっていう噂！ もうあなたの事は信じられない！ さようなら！」

「あ……………」

藤沢は引き止めようと手を伸ばしたが届かず、女子生徒は向こうへ走って行ってしまった。

その背中を見送り、藤沢は頭を掻きながら、

「やれやれ、またやり直しか……」
と呟く。

「買い物を見られたって、多分佐々木さんの時だな。って事は、先週の土曜日の午前中か。そこまで時間を戻らなくちゃ、ね」

言うと、藤沢は目を閉じた。程なくして藤沢の体は白い光に包まれ、

——そして、そこから消えてしまった。

それと同時刻。

数学の補習を切り抜け、幾分晴れた心持で廊下を歩いている坂巻に、

「あ、坂巻君」

と、後ろから声がかかった。振り返ると、藤沢が爽やか笑顔でこちらへ駆けて来る所だった。

「坂巻君も部室に行く所？」

「ああ、そうだよ」

言いながら坂巻は嘆息する。

「しかし、今ここに一体何人の『君』がいるんだ？ さっき階段の踊り場で、女の子とデートの約束してたのを横切って来た所だぞ」

「そんな事言われてもねえ」

藤沢は頭を掻く。

「そもそも時間移動が自由にできても——つまり、移動先の時間を自由に指定できても——元々俺がいた空間の時間が今現在、何時何分何秒なのかなんて、正確には分かりっこないからねえ。戻ろうにも戻れないのさ。原子時計でも持っていれば良かったのかもしれないけど、もう手遅れだ。だから、時間によって俺が増えたり消えたりしても仕方ないよ」

「だからって、女の子に振られる度に時間移動するのともうかと思うよ。十八人の女の子それぞれと別々の場所で同時にデートをした

人間なんて、後にも先にも君だけだ」

「ふふ。光栄だね」

「褒めてない！」

「まあ、俺は俺なりに有意義に能力を使ってるだけさ」

「……………はあ。僕より使い勝手の良い能力を持ってるっていうのに…………」

坂巻はため息をつきながら、藤沢と並んで部室へと歩を進めていった。

「——と言うか、何で君は『ESP部』に入ってるんだ？」

「ふふ。お気楽部だからさ」

(後書き)

思いつきでシリーズ化してみました。
どうでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6560c/>

ESP部のとある現状

2010年10月8日15時29分発行